

◇2000年度 浦野環境教育奨励金 活動報告

トウキョウサンショウウオ保護活動の普及と
谷津田の保全

千葉県立幕張総合高等学校
早川雅晴

1. はじめに

サンショウウオ科のサンショウウオは世界中で36種類が知られている。国内では18種類だが、その内17種類が日本固有種である。トウキョウサンショウウオの学名は*Hynobius tokyoensis*で、その名の示すとおり、関東地方の局所的に分布している固有種である。トウキョウサンショウウオは、その生活史の中で、産卵及び幼生の生活の場である水場と、変態後の幼体及び成体の生活の場である森林をうまく使い分けて生活している。しかし、近年は圃場整備等により、常に水のはってある水路が減少し、産卵場所が不足している。また、里山の環境変化により、成体の住める場所も不足してきている。このため、1900年代初めには、千葉市では産卵が確認できなくなってしまった。以前は比較的身近な生物であったトウキョウサンショウウオが、今や絶滅の危機に瀕しようとしているので、この保護活動及び保護のための啓蒙を学校教育の中で取り組んでいる。

2. 方法及び効果

1. 飼育

1988年から、生徒一人一人にサンショウウオを1匹ずつ飼育させている。期間は卵から孵化してすぐの幼生から、幼体に変態する（4月から7月）までである。飼育は簡単で、生徒はそれぞれの入れ物の中にだいたい3日に1回水換えと餌やりを行うだけである。この間、生徒には観察日記を付けさせている。飼育に際しては、餌のイトメと汲み置きの水を常に準備している。

1-1. 初めのうちこそサンショウウオを嫌がっている生徒も、毎日面倒を見ることで7月にはほぼ全員が自分のサンショウウオをかわいいと言う

ようになり、自分のサンショウウオ自慢を始める。7月以降もこのまま飼育を続けたいと希望する生徒も毎年何人もいる。嫌われることの多い両生類であるが、この12年間で最後まで嫌がる生徒は1人もいない。飼育を通して両生類に対する拒否反応がかなり取り除けたと思う。また動物愛護の精神の基盤を作ることができたと思っている。

1-2. 両生類の後期発生を継続観察させることにより、発生のダイナミズムを体感させることができた。また、カエルの発生との比較により教科の学習を深めることができた。

2. 生息数の回復

一般に哺乳類を除く野生生物では、生まれて間もない時期の生存率が低い。トウキョウサンショウウオの幼体の場合も上陸率は、0.2~10.7% (Kusano1981)と低い。これに対し、飼育条件下ではこの12年間で60~80%と圧倒的に高い。そこで幼生期に飼育をして変態後に生息地に戻すことで、トウキョウサンショウウオの個体数の回復を目指している。また間接的にはあるが、生徒一人一人にサンショウウオ保護の一端を担っていることを、自覚させることができた。

3. 谷津田の保全

スライドを使って、里山・谷津田とはどういう場所なのかや、人の生活との関わり合いについて示した。サンショウウオの生活環を通して谷津田の重要性について考えさせることができた。

3. 今後の課題

生物に直接触れる機会の少ない生徒にとって、飼育体験は有意義なものである。しかし必ずしも身近な生き物ではないので、サンショウウオを保護する気持ちが一過性のものに終わってしまう可能性は高い。また、飼育により一時的に個体数を増やすことは可能かもしれないが、根本的な解決策にはならない。基本的問題は、生息地である里

山の自然の変化であり、大切なのは生息地（谷津田）及びその周囲の保全である。このためには、時間的・距離的な問題をクリアして生徒が谷津田に直接触れる機会を作ることが重要だと思っている。この体験をふまえて将来的には生徒自身が具体的な保護策を考え、行動に移させていくのが今後の目標である。

引用文献

- Kusano, T. 1981. Growth and survival rate of the larvae of *Hynobius nebulosus tokyoensis* tago (*Amphibia Hynobiidae*). *Res. Popul. Ecol.* 23:360-378.